



Title	「初級発音聴解」シラバス決定に向けて：研修ABコースLLクラス実践報告
Author(s)	和田, 弥恵子; Wada, Yaeko
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 4, 115-132
Issue Date	2000-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45591
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC004_008.pdf



「初級発音聴解」シラバス決定に向けて - 研修A BコースLLクラス実践報告 -

和田 弥恵子

要 旨

本稿は、1997年度10月期から2000年度4月期までの研修A Bコース「初級発音聴解」(通称LLクラス)に関し、まず99年度までのシラバスとその問題点、次に2000年度の新シラバスとその評価についてまとめたものである。LLクラスは、日本語の発音に関する体系的知識を獲得し、知覚と産出の両面を向上させること、及び既習文法項目を含んだ教材の聞き取りを通して聴解力を促進することを目的としている。しかし、従来のシラバスでは、特に発音に関し、日本語らしさにより大きく影響すると言われる韻律よりも単音に重点が置かれており、また文字を介した活動であったために、表記の正確性と音声の知覚の実態が一致しないという問題や、産出の訓練が反復にとどまっていたという問題等が指摘されていた。一方、聴解に関しても、個人差への対処という点での問題があった。そこで、2000年度の研修コース時間割の改編を機に、従来の課題の解決を図ったシラバスの大幅改定を行った。発音に関しては初回到発音チェックを行い、そこで明らかになった単音レベルの問題は最小限をクラスで扱い、他は母語の干渉等により共通の傾向を持つ学習者を集め、グループプレッスンを行った。クラスでは主に拍と韻律を扱い、特に「自己モニター」の促進を目指した産出の練習に時間を割いた。また、聴解では宿題を定期的に課し、小テストを実施したことで、クラス活動の効率化と多様化を図った。学期終了後のコース評価では、LLクラスの各目的の達成度について、9割の学習者が肯定的に評価した。

【キーワード】 LL、発音、聴解、韻律、自己モニター

1. はじめに

本稿は、1997年度10月期から2000年度4月期まで筆者が担当した研修A BコースLLクラス(正式名称「初級発音聴解」)のシラバスに関してま

とめたものである。

LLクラスの内容は発音と聴解の2部に大別できるが、目的としては、日本語の発音に関する体系的な知識を獲得し、知覚と産出の両面の正確性を向上させること、及び、既習文法項目を含んだ教材の聞き取りを通して聴解力を促進することが挙げられる。しかし、特に発音に関し幾つかの問題点が指摘されていた。まず、単音が中心であったため、日本語らしい自然な発音により大きく影響されると言われる韻律（佐藤1995、大山・三浦1990、関1989）の訓練への重点の移行が課題となっていたことである。また、ディクテーションが活動の柱となっていたために産出が教師の発音の反復という形式にとどまっていたが、小河原(1997)も指摘するように、モデル発音の模倣だけでは正しい発音の獲得に至りにくく、個々の学生に与えていたフィードバックの内容をクラス活動の中に取り入れ、時間をかけて意識化を図る方法の必要性が感じられていたことである。一方、聴解に関しても、限られたクラス時間と個人差への対処という点での問題が挙げられていた。

各期終了後に実施するアンケートの結果等から教室活動には随時修正が加えられたが、2000年度よりの研修コース時間割の改編を受け、週1回で総時間数も従来の25%減となったクラスの効果を最大限にするため、これまでの課題の解決を図ったシラバスの大幅な改定を行った。

本稿ではまず99年10月期までのシラバスとその問題点を概観した後、2000年度4月期に採用したシラバスとその評価について述べる。

2. 97年10月期-99年10月期

2.1 97年10月期-98年10月期

LLクラスは1コマ50分のクラスが週2コマ×18週あり、小池真理氏と共に担当した。

2.1.1 発音セクション

発音セクションのシラバスは、以前より使用していた佐藤豊氏作成のものをほぼ踏襲し、拗音、促音、が行鼻濁音、「つ・す」等、各回日本語に特徴的な音韻・音声上の問題を取り上げ、その音を含んだ単語のディクテーションを行った（表1参照）。答え合わせ後に行われる教師の発音に続けての反復発音練習は各自のテープに録音され、希望者はテープを提出し、

発音のチェックを受けた。

2.1.2 聴解セクション

聴解セクションは、テキストに『わくわく文法リスニング99』（以下『わくわく』）を使用し、文法クラスで学習した項目を聴解面から補強した。活動は、クラス全体で行うものと個人学習を適宜組み合わせ、必要に応じてスクリプトを配布し、個人差に対応した。他にも、適宜GPL（文法クラスで使用されるテキスト）の語彙の録音や、聴解テキストとして他のもの（『楽しく聞こう』、『初級毎日の聞き取り』など）を使用し、より長い会話の聞き取りを行った。

2.1.3 その他の活動

98年10月期からは、新たに「動詞の活用」と「Q & A」を活動に加えた。「動詞の活用」とは、主にて形の定着と拍感覚の練習を目的として、既習動詞の活用形を、辞書形、ます形、て形、た形・・・と2拍で1回手をたたきながら順に唱えていくものである。「Q & A」とは、既習文型を使った簡単な質問に対して答えを組み立てる応答練習を目的として、質問が録音されたテープを学習者が聞き、続いて設けられたポーズの間に答えを各自が吹き込む形で行うものである。希望者はクラス終了後テープを提出し、答えの正確性、適切性などに関して教師のチェックを受けた。

表1 97年度10月期のシラバス

月	日	曜日		発音(ディクテーション)	聴解(わくわく)
10	15	水	あいさつ		
	20	月	教室の日本語		
	22	水		母音	1,2,3
	27	月		母音	11,12
	29	水		母音の無声化	4,5,8
11	5	水		母音の無声化	13,24
	10	月		長音・短音	22,23
	12	水		長音・短音	7,19
	17	月		復習	6,10
	19	水		拗音	14

	26	水		撥音	15,16
12	1	月		撥音・促音	21,27
	3	水		促音	20,46
	8	月		漢字熟語音	37,75
	10	水		「が」	30,31
	15	月		「が」「ら、だ、な」	47,89
	17	水		「ら、だ、な」	40,43
1	12	月		復習	33,34
	14	水		「つすしちじず」	67,54
	19	月		「つすしちじず」	49,69
	21	水		イントネーション	52
	28	水		イントネーション	35,26
2	2	月		擬音語・擬態語	45,74
	9	月		アクセント	28,29
	16	月		外来語	81,36
	18	水		外来語	94,48
	23	月		未定(文の聞き取り等)	51,53
	25	水		〃	59,82
3	2	月		〃	83,84
	4	水		〃	63,64,65

2.2 99年4月期-99年10月期

99年度は原田明子氏との担当となった。

この年度からはL1クラスが独立した成績評価の対象となり、それに伴いディクテーションに関して小テストを学期中4回実施した。小テストでは、クラスで1度取り上げた音声のディクテーションの中で誤答の多かった単語を中心に再度復習の形で出題し、音と表記の定着を図った。

また、10月期に初めて実施した活動として『毎日の聞き取り』の個人学習が挙げられる。これは、この期に語彙などの定着が悪く、聴解や「Q & A」などの活動が殆ど成立しない学習者が多く見られたために、学期の後半に『毎日の聞き取り』を第1課から個人学習して総復習を行ったものである。但し、能力の高い学生は開始する課を自ら選択し、進度を調節した。この期は学習者間の能力差の開きが特に目立った期ではあったが、個人差

への対応はLLクラス全般でしばしば課題となった。

3. 97年10月期から99年10月期までの問題点

3.1 動詞の活用

この活動では、同一の動詞表を言い慣れるまで通常2週間使用していたが、て形の定着がほぼ達成されたと思われた後は行わなくなっていた。しかし学習者のアンケートには、他の新しい活用形（可能形、使役形等）も随時入れて最後まで続けたかったという意見も見られた。また、この活動を通して把握させようとした拍感覚やアクセントは、独立した説明と練習の時間を設ける必要が感じられた。

3.2 発音セクション

発音セクションで採用していたディクテーションには、このセクションの目的を改めて明確にする過程で幾つか問題が認識された。

まず、日本語の音韻・音声上の問題として教師側が選択したものが、学習者にとって聴取上、また発音上困難なものと一緒にしているかどうかを改めて調査する必要が感じられた。例えば撥音を取り上げた回の学習者の表記を見ると、「洗面所」を「せいめんじょ」「せんめんよ」「せんぬんじょ」「せんぬんよゆう」等とする誤答が見られ、取り上げた音韻以外の部分での誤りが少なくなく、その誤答傾向も多様であったが、テープに録音された発音には、殆ど問題がなかったのである。一方、逆に表記は正確でも、発音の際に拍やアクセントの点で問題があるケースもあった。この例からも、表記の正確性が聴取や発音の実態を反映したものとは判断しにくいことは明らかで、改めて音声の知覚と産出の点で困難なものの把握と、その指導法の再検討の必要性が感じられた。

また、単語のディクテーションという形態をとる限り、発音練習は語を単位とした単音のレベルが主となり、韻律の練習には別の方法が必要であった。

このディクテーションには、当初の目的として、文法クラスで時間を割くことが困難な、新出語彙の導入という側面があった。その後、未習語の書き取りは難しいという学習者の意見を取り入れ、既習語を用いて単語の復習という目的も兼ねた活動に転換したが、その結果、活動がいわば単語テストのような様相を呈したと考えられる。しかし、LLクラスの本来の

目的に照らせば、表記より発音の正確性を向上させることに重点を置いた活動の検討が望まれた。

3.3 聴解セクション

取り上げる文法項目の選定基準として、98年4月期より文法クラスでクイズが終わった課の項目を扱うこととした。当初はL1クラスの前日や当日に学習した文法項目を扱うことが多かったが、文法クイズのために学習した後の方が聴解もスムーズである、という学習者の意見を採用し、変更した。しかし、常に個人差の問題は存在し、高速で一斉録音をした上での個人学習の方法もしばしば取り入れたが、聴解を苦手とする学習者に対し十分時間を割くことができないこと、また能力の高い学習者により高度な教材を提供できないことが解決すべき問題として残った。

3.4 テキスト

聴解のテキストは『わくわく』を各自購入させて使用、発音に関しては各回教師が用意する印刷物を使用していた。問題点としては、テキストやテープを忘れて来る学生への対処、また、『わくわく』の回収が困難であるために¹⁾ 教師が聴解面での学習者の誤答傾向を十分把握できなかったことが挙げられる。発音に関しては、特に小テストの実施を開始した期から、L1専用のファイルに配布物を保管させる、ディクテーション用紙に升目をつける、正答を書き込むスペースを設ける、等により誤答の意識化と復習を促したが、効果を実感するには至らなかった。

3.5 Q&A

まず指摘できるのが、全員のテープを聞き返し、個々にフィードバックを用紙に書き込む教師の時間的負担の大きさである。フィードバックが文字に頼らざるを得ないことも、一部の学生にとっては新たな負担となったであろう。また、解答に要する時間が学生により異なるために（解答の文を考えるためにテープを止める方法があったにも関わらず）、教師にとってはテープを予め作成する段階で、設定するポーズの長さの判断が難しいという問題が常に存在し、学習者側には、安全策をとって最短の解答で済ませる学生と、一方、折角長く話そうとするのを途中で打ち切らなくてはならない学生が出るというジレンマが生じた。また、質問の種類によって

は答え方の適切性の指導が必要で、それは他のクラスに譲るべきだと感じられた。

3.6 評価

成績はディクテーションの小テストが主な対象となり、聴解の活動に関してはclass participationという形での評価となった。しかし、テストのために表記は正確に覚えてくるが、聴解では細部に捕らわれて大意を把握できない学習者、表記のミスは多いものの聴解では即座に内容に反応できる学習者、時間はかかるものの、着実に理解を進め正解に辿り着く学習者など、多様な実態をどう妥当に評価に反映するかが課題となった。聴解面のより細かい学習者の解答状況把握のために、テキストを回収する必要性も感じられた。

3.7 GPL語彙録音

親族呼称、自動詞・他動詞、敬語など、GPLの語彙が複雑で多い時には随時録音を行ったが、学習者のアンケートには、例文も含めGPL全体の音声テープが必要という意見も見られ、課題となった。

3.8 オリエンテーション

初回のクラスで、ブースの使用法などに関するオリエンテーションを行っていたが、通常のテープレコーダーの操作にも精通しない学習者もあり、機械操作の問題でクラスが中断することのないよう、オリエンテーションの内容をさらに充実、徹底させる必要があった。

4. 2000年4月期の新シラバス

2000年4月期からは研修コース全体の時間割が改編され、LLクラスも1コマ90分のクラスが週1コマとなった。コースの期間も15週へと減り、そのうち4月期はテスト前の質問の時間などを除き、実質13週のLLクラスとなった。それに伴い、前年度までの問題点の解消も図った新たなシラバスを作成した(表2)。

表2 2000年度4月期のシラバス

週	月日	動詞活用	発音	聴解		グループ レッスン	
				小テスト	わくわく、毎日等 宿題提出		
0	4/17	レッスンオリエンテーション（ブース基本操作：あいさつ、教室の日本語）、 発音チェック、テープレコーダー貸出等					
-	4/24	(カタカナ)					
1	5/ 1	-L. 8	日本語の発音概論 (母音の無声化、 撥音+母音・半母音)		文法クイズ -L.5 1.2,3,11,12,13 I	5/ 8	グループ 1
2	5/ 8	-L.10	し、す、ち、つ、じ、ず		-L.8 4,8,6,5,24,毎2	5/15	グループ 2
3	5/15	-L.12	日本語のアクセント		-L.10 7,18,23,38,19,22 I	5/22	グループ 3
4	5/22	-L.14	モーラ1：モーラとは	小テスト 1(1-3)	-L.13 10,21,15,16,27 I II	5/29	グループ 4
5	5/29	-L.17	モーラ2：促音		-L.16 75,20,46,毎19-2	6/ 5	グループ 5
6	6/ 5	-L.20	モーラ3：長音		-L.19 47,30,89,58,33,40	6/12	グループ 1
7	6/12	L.20	モーラ4：拗音	小テスト 2(4-6)	-L.20 フィードバック	-	-
8	6/19	-L.24	プロソディー1		-L.22 71,楽17,毎39,41	6/26	-
9	6/26	-L.27	プロソディー2		-L.24 楽11,毎31,42	7/ 3	-
10	7/ 3	-L.29	プロソディー3		-L.26 毎21,14	7/10	-
11	7/10	-L.31	プロソディー4		-L.29 毎40,16,20	7/17	-
12	7/17	-L.33	日本語の発音まとめ 動詞のアクセントまとめ	小テスト 3(8-11)	-L.31 毎38,37,35,28,29	-	-

毎：毎日の聞き取り 楽：楽しく聞こう 無印：わくわく文法リスニング99

4.1 動詞の活用

クラスが週1回になったことで、同一の動詞表を2週以上にわたって使用する効果はあまり望めないと考え、反復練習はテープを用いて各自自宅

で行うよう指導することにした。代わりに、前の週に文法クラスで学習した動詞をすべて取り上げた毎回新しい動詞表を配布し、最終的に全動詞、計200余りの活用表が完成されるように実施した。新出の活用形は随時加え、幾つかの欄は空欄にして学習者に復習として確認した。動詞のアクセント型に関しては、別途、発音セクションで説明の時間を設けた。

4.2 発音セクション

発音セクションの課題としては、学習者にとって聴取上、また発音上困難な発音の把握、それらを聞き分ける、発音し分ける能力を育成するための指導法の確立、また、韻律に重点を置いたシラバスの作成が挙げられ、そのために大幅なシラバスの変更を行った。

4.2.1 発音チェック

初回のクラスで発音チェックを行った。これは、いわば事前発音診断で、従来のディクテーションで取り上げていた音声、及び助川(1993)の調査を参考に、学習者がしばしば困難を感じる音声を含む単語と句を反復発音させ、音の保持力と再生力を診断する目的で実施したもので、以下の音声について学習者の傾向を調べた。

無声化母音、 [s] / [c] の区別、 [(d)z] / [(d)ʒ] の区別、
[ei] / [si] / [tei] の区別、 [(d)zi] / [(d)zi] の区別、
[su] / [tsu] / [tcu] の区別、拍感覚(拗音、長音、促音、撥音)、
後続が母音・半母音の撥音、その他(円唇[u], 巻き舌[r], アクセント等)

このチェックの結果から、単音レベルの問題は、全員に共通する最小限のもののみクラスで扱い、母語の影響等により一定の傾向を示す学習者は、後述するグループレッスンで指導することにした。そのため、発音セクションのシラバスとグループレッスンのグループ分けは、この発音チェック実施後に決定した。4月期に関しては、クラスで扱う必要があると判断された音声は、1)無声化母音、2)後続が母音・半母音の撥音、3)「し・ち、す・つ、じ、ず」であった。グループレッスンで取り上げた音声は後述する。

4.2.2 発音オリエンテーション

日本語の音韻体系と音声上の特徴に関する説明は、かな導入の際にも適宜行われているが、4月期はL1クラスで改めて英語のハンドアウトを配布し、発音オリエンテーションを行った。ハンドアウトは、筑波大学の『Situational Functional Japanese Vol.1 Notes』の中からの抜粋を使用した。このオリエンテーションは前週に行われた発音チェックのフィードバックも兼ね、4月期は特に無声化母音、(半)母音の前の撥音に関する説明と練習に焦点を絞った。

4.2.3 グループレッスン

発音チェックの結果から共通の問題を持つ学習者を集め、A Bクラスを5グループに分けた。各グループは4、5人で構成され、それぞれの課題は以下の通りであった。

- 1) 音の保持が悪く子音だけでなく母音も曖昧に発音される
- 2) ツとチュ、ザ行とジャ行の混同
- 3) 後続が母音の撥音とその拍感覚、アクセント
- 4) 後続が母音の撥音とその拍感覚
- 5) 後続が母音の撥音とその拍感覚、低アクセント母音の曖昧化

グループレッスンは、授業の最後の15-20分程度を使い、別室で行った。その間、残った学習者は聴解練習の続き及び宿題を個人学習した。

各グループでは、少人数のよりリラックスした雰囲気の中で、課題の音声教師が集中的に指導できただけでなく、小河原(1998)が用いた評価札を使用することにより、学習者も互いの発音をチェックし、聞き取りや発音の自分なりの基準を伝授し合う、という活発なやりとりが見られることもあった。これは、小河原(1999)が指摘する学習者の他者意識傾向がうまく作用した例だと考えられる。また、グループによっては、L1クラス全般に対する意見の吸収や、発音に関する他の疑問点に答える機会となり、短時間だったにも関わらず当初の意図を越えた効果が見られた。学習者から挙げられた主な疑問点は以下の通りである。

- 1) ラ行は [r]、[r̥]、[l] のいずれか
- 2) ザ行は摩擦音が破擦音か
- 3) シ[ci]とヒ[ci]は互いに置き換え可能なのか
- 4) 清濁(有声・無声)と有気・無気との混同による弁別困難

5) オの長音は[o:]か[ou]か

いずれも異音をネイティブの発音に見出した上での疑問であった。

4.2.4 モーラ (拍) ・プロソディー (韻律)

モーラ (拍) とプロソディー (韻律) の練習には各4週を割いた。シラバスの作成にあたっては、「自己モニター」(小河原 1998) の促進を目指し、研修コース終了後も自己の基準を用いて発音の自己修正ができる意識と能力を育成することを目標とした。新たな試みとしては、自己評価基準の形成のために、教師のモデル発音を提示するだけでなく、A Bクラス以外の学習者の発音を聞かせ、正誤判断させる活動も多く取り入れたことである。これはクラスの緊張緩和と学習者同士で相互に評価する態度の育成に効果があったと思う。

4.2.4.1 モーラ (拍)

拍とは何か、拍の数え方、文字数との関係、音節との違い、拍が正しくない発音例などを学習した後、2週目以降は促音、長音、拗音の順に練習した。拗音では、アクセント核があるところで拍が伸びないように練習した。各回では、他者の発音をテープで聞かせ評価するという活動の他、2拍で1つのビートをとり反復練習、その後、各自で自己再生、最後にはビートの表、裏の音、文字数との対応を意識しながらディクテーションも行った。

4.2.4.2 プロソディー (韻律)

プロソディー (韻律) では、主にアクセントの聞き分けを通してピッチの上下の認識を訓練した。ピッチアクセントとストレスアクセントとの違い、短い語から長い語までのアクセント型の同定練習、反復練習、自己再生、最後にはアクセント型が異なる同音異義語と、動詞のアクセント型のルールを整理した。モーラ同様、他者の発音を用いて比較する活動も定期的に行った。テープを提出した学習者のフィードバックを、本人の了解をとってクラスで行うこともあった。尚、ピッチの上下の表し方は、串田他(1995)、松崎他(1999)の「プロソディーグラフ」を参考にした²⁾。

4.2.5 テープ提出とフィードバックシート

発音セクションのテープは、従来通り原則として希望者のみクラス後提出させ、特に拍とアクセントに関するフィードバックをして返却した。フィードバックシートはフォーマットを統一した。発音が気になる学習者には特に提出を促した³⁾ 他、全員提出も2度行い、習熟状況を確認した。

4.3 聴解セクション

前年度同様、文法クイズを終了した課の項目を扱った。週1回のクラスを有効に使うため、今年度より定期的に宿題を課した。必要に応じ、時間の差が生じやすい単純な聞き取りは宿題とし、複雑でやや長い発話の聞き取りをクラスで扱ったり、逆に単純なものはクラスで一斉に練習して確認し、複雑なものは宿題にして時間をかけて行わせたり、また、練習の一部のみクラスでやり方を説明し、続きを宿題に回したり、と、教室学習と自宅学習双方の利点が活かされ、且つ習熟度の個人差が教室活動に及ぼす影響が最小限になるように配慮した。その結果、後半は『わくわく』より発話が長く、文脈も明らかな聞き取りが多い『毎日の聞き取り』や『楽しく聞こう』から多くの練習を取り入れることができた。教材の大半に『わくわく』を使用していた昨年度までとは単純比較できないが、課の数でもほぼ同等、練習の量や多様性という点ではむしろ多くの聴解教材を取り上げることができた。

宿題は回収し、誤答が多かったものに関しては次回のクラスでフィードバックを行った。また、3、4週に1回の割合で復習小テストを行い、評価の対象とした。

また、教師が使用するテープは、扱う課やテキストが増加したこともあり、取り上げる順に1本に編集して操作の煩雑さを防いだ。

4.4 テキスト

『わくわく』、『毎日の聞き取り』等、各回に使用する聴解テキストはコピーを作り、使用日と宿題に関しては提出日を付記し、ハンドアウトとして毎回配布した。これによりテキストの忘れ物は生じえなくなった。また、複数の課やテキストを使用する際にも同一紙面上に収めるようにしたことにより、授業の進行や宿題の回収が容易になった。さらに希望者にはクラスでのフィードバック終了後、スクリプトを配布した。一方、発音セクシ

ョンに関しては従来通り各回印刷物を配布した。

また、予備テープを毎回作るようにした。これはテープを忘れた学生や何らかの理由で録音に失敗した学生に授業中貸し出せることを目的としたものである。4月期にこの予備テープを貸し出す必要が生じたのは2回のみであったが、一部のブースの録音状態が悪い（テープの回転速度が一定しない等）ことを考慮すると、必要な対応に思われる。

4.5 Q&A

既習の文型・語彙を用いた質問に対して的確な答えを産出する練習はL1クラスの目的を越えるものと判断し、活動から除くこととした。

4.6 評価

昨年度までは発音セクションの評価がディクテーションの表記の正確さによって測られることの適切性が検討課題となっていたが、4月期は聴解セクションの得点を主な評価対象とし、発音セクションに関しては母語の干渉の軽重も考慮し、絶対基準を設けた到達度の評価ではなく、発音の聞き分け・産出の活動全般への取り組みの熱心さを評価の対象とした。4月期に採用した評価の割合は以下の通りである。

聴解小テスト	50% (3回実施)
class performance	30% (発音セクションへの取り組み)
participation	20% (クラスの参加度、宿題・テープ提出状況、忘れ物、出欠・遅刻等)

4.7 GPL語彙録音

GPLの語彙、例文を録音したテープを柳町智治氏と作成し、希望者にダビングして配布した。

4.8 オリエンテーション

初回のクラスで行うオリエンテーションの内容を、特にブースの操作に関して充実させ、授業開始前の準備、テープ挿入の際の向き、再生、音量調節といった基本操作から、教師の集中操作で練習する場合、個人学習の際にテープのモデル発音の後に続いて録音する場合、単独で録音する場合など、それぞれのボタン操作を練習し、さらにテープ提出時に教師のチェ

ックを受けたい部分まで頭出しすることを徹底させた。その結果、単純比較はできないが、4月期は機械操作のトラブルでクラスの進行為妨げられることは非常に少なかった。

また、教師用の操作マニュアルも作成した。これにより今後LL教室を初めて使用する教師の負担が多少でも軽減されることを望む。

5. 学習者の評価

4月期終了後、LLクラスのコース評価を5段階のアンケート形式で行ったところ、AB計21名のうち20名から回答を得た。LLクラスの目的の達成度は、発音の聞き分けに関しては13名、産出に関しては16名が「非常に役立った」と評価し、「役立った」と合わせると各19名、17名となった。また聴解に関しては、既習文法項目の正確な聞き取りという点では15名、やや長い会話の大意の把握という点でも15名が「非常に役立った」との回答で、「役立った」と合わせると18名ずつとなった。また、新たに取り入れた活動等についても問を設けた。質問用紙の不備で回答が得られなかったものもあったが、「非常に役立った」と「役立った」を合わせると、動詞の活用が15名（2名無回答。以下同様。）、宿題が15名（4名）、発音のフィードバックが13名（5名）、小テストが13名（5名）、GPLの音声テープが13名（6名）となり、無回答の解釈はできないものの、いずれも高い評価が得られたと思う。

6. 今後の課題

2000年度4月期のLLクラス新シラバスは、全般的に高い評価を得たと言える。しかし特に発音セクションの指導に関しては、各期の学習者の人数や母語、様々な要因により指導項目や指導法の微調整が必要だと思われる。今後は、継続的に学習者の傾向の記録を蓄積し、指導の効果の測定をより客観的に行っていくことが求められると思う。

注：

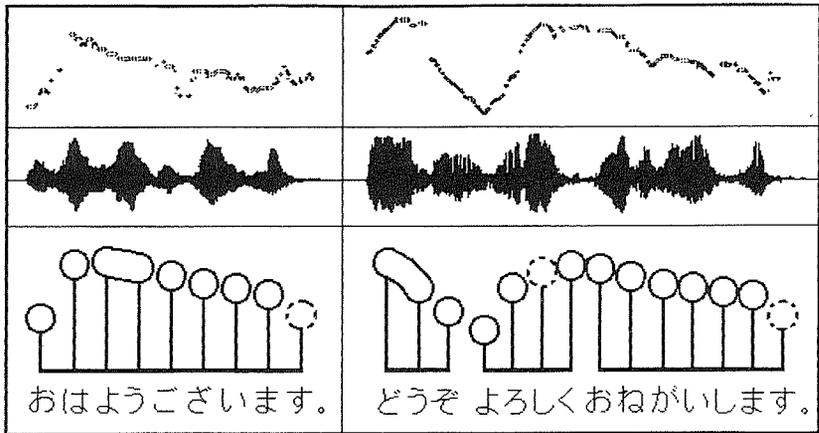
- 1) 理解に時間を要する学習者には、授業中に録音したその日の聴解教材のテープとテキスト、及び希望者には授業後配布したスクリプトを持ち帰り、自宅で復習することを奨励していた。そのため、テキストの回収は行わなかった。また、正答がわかった時点で誤答を消してしまう学習

者も少なくなく、授業中の見回りでも全員の誤答傾向を正確に把握することは困難であった。

2) アクセントの表示法は、従来斜め線 \nearrow や鉤型 \hookrightarrow など色々用いてきたが、学習者からは、斜め線が視覚的にわかりやすいという反応が得られてきた。しかし、そのアクセント記号でピッチの上下をコントロールできない学習者もいたため、今回時間をかけてアクセントを取り上げられたこと、また、斜め線に比べ、よりプロソディーとモーラ全般の記述が明確になった「プロソディーグラフ」は有効であったと思う。広島大学の松崎寛氏は、自身のホームページの中でプロソディーグラフについて以下のように説明している。

日本語らしい自然な発音のためには、韻律、特に、高さや長さの指導が大切だと言われています。これを系統立てて教育するには、韻律をわかりやすく表示する方法が必要となります。そこで、音声分析機を用いてピッチ曲線を抽出し、それをトレースしてわかりやすく視覚化した「プロソディーグラフ」を開発しました。簡単に説明しますと、

- ・ 円の長短により、長い音(特殊拍が後部拍の音節)・短い音(拍)が表せる
 - ・ 破線の円により、母音が無声化した拍を表せる
 - ・ ○の位置により発話中のアクセントの高さの変化を表せる
 - ・ 句末音節の○の角度や引きのばしにより、イントネーションの微妙な変化を表せる
 - ・ 自然減衰、質問文における全体的なピッチ変化や、プロミネンスなどの量的な変化を表せる
 - ・ 音節間・句間等の間隔によるポーズ、全体のつまり具合による発話速度など、多くの情報を付与できる
- という特長があります。



(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hiroshim/>)

3) 母語がミャンマー語のある学習者は、英語の理解も多少不自由だったため、個人指導でフィードバックを行った。母音が曖昧で、鼻母音化しやすい傾向、音節内の声調とそれによるアクセントと拍感覚の乱れ、音節間で[?] (声門閉鎖) が起こる等の特徴が見られたが、特に声門閉鎖に関しては、声門閉鎖の有無に対応する母語の文字を使用して説明すると、理解が得られたと述べていた。また、拍感覚に関してはVT法の手の動きを取り入れ指導した。今後、発音の問題別、また、学習者の母語別のこのような経験の蓄積が望まれると思う。

参考文献：

- 大山玄・三浦一郎 (1990) 「日本語学習者のプロソディーに関する研究」
『日本語音声の韻律的特徴研究報告』 3号 pp.98-101
- 小河原義朗 (1997) 「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』 92号 pp.83-94
- (1998) 「評価札を用いた発音指導の試み—自己モニターの促進を目指して—」『日本語教育学会第6回研究集會予稿集』
- (1999) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安」『東北大学文学部言語科学論集』 3号 pp.13-24
- 串田真知子・城生伯太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑 (1995) 「自然な日本語音声への効果的なアプローチ：プロソディーグラフ —中国人学

- 習者のための音声教育教材の開発—』『日本語教育』86号 pp.39-51
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」
『世界の日本語教育』5号 pp.139-154
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向 —アンケート調査の結果から—」『日本語と日本語教育 文部省重点領域研究「日本語音声」
D1班 平成4年度研究成果報告書』pp.187-222
- 松崎寛・築地伸美・串田真知子・河野俊之 (1999) 「プロソディーグラフを用いた日本語音声教育」第1回日本語音声教育方法研究会
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68号 pp.175-190

Revising a 'pronunciation and listening comprehension' syllabus :

A report on the LL class of an intensive Japanese course for beginners

WADA, Yaeko

This paper reports on syllabuses for pronunciation and listening comprehension ('LL class') in the intensive Japanese course for beginners, from autumn term in 1997 through spring term in 2000. Firstly, it discusses the syllabus used until 1999 and problems which arose in practice. Secondly, it describes a revised syllabus for the year 2000 and its evaluation.

The content of the LL class can be divided into two main areas: pronunciation and listening comprehension. The goal of the former area is to acquire a general idea of the Japanese sound system and to improve both the perception and production of pronunciation. The latter area aims to improve learners' listening competence through materials containing grammatical items already taught. However, several problems which do not necessarily facilitate these goals became evident in the old syllabus. For example, in the area of pronunciation, focus was placed on single sounds, and dictation measured recognition of these sounds. However, greater emphasis should be put rather on prosody, which affects the naturalness of utterances more, and priority should be given to accuracy of pronunciation rather than to spelling of words. A substantial revision of the syllabus took effect ahead of the academic year 2000. Particularly in the pronunciation section, more time was devoted to accurate distinction and production of moras and prosody. According to learners' course evaluation, 90% answered that the LL class was 'very helpful' or 'helpful' in accomplishing the goals of both the pronunciation and the listening areas.